

訂 正

著者名 : 腰越 滋

タイトル: データからみた現代の子どもの読書傾向 : 読書媒体の広がりに着目して

出典 : 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 Vol.69 no.1 p.55-68
<http://hdl.handle.net/2309/148851>

訂正内容:

P.56 図1 「『読書活動』に関する実態調査」 SEM による暫定最終 model を差し替えた。

訂正理由:

P.56 図1 に看過できない誤植が発見されたため。

令和元年 11 月 21 日

東京学芸大学学術情報委員会

データからみた現代の子どもの読書傾向

—— 読書媒体の^{メディア}広がりに着目して ——

腰 越 滋*

学校教育学分野

(2017年9月26日受理)

1. 問題設定とそれまでの経緯

筆者が子どもの読書に関心を抱いたのは、公益社団法人・全国学校図書館協議会 (*Japan School Library Association*: 以下、全国SLAと略記) が、毎日新聞社と共に実施してきた「学校読書調査」の設計・分析に参与したのがきっかけである。筆者が参画したのは、「学校読書調査」の第57回 (2011年度) から第59回 (2013年度) までの3年度間であったが、調査期間内に本を一冊も読まない「不読」と称される児童・生徒の読書活動を妨げる原因を探ったり (腰越, 2013 & 2016), またその逆に、児童・生徒の読書を促進する要因が何かを考察したりしてきた (腰越, 2014)。

これらの拙稿では、「学校読書調査」での採取 data を、許諾を得て分析したが、調査項目が限定的であったこともあり、十分な分析ができたとは言い切れず、特に社会学徒が必ずと言ってよいほど問題にする社会階層差の問題¹については、殆ど議論できずにいた。

そこで筆者は、自らデータ採取することを考え、獲得研究資金の科学研究費補助金研究²の一環として、2015年末に中高生対象の「『読書活動』に関する実態調査」(以下「読書活動」実態調査と略記) を実施した。この中で家庭での経験 (Q16) を問い、階層差などの親の社会経済的地位 (Socio-economic Status, SES) から派生する家庭の文化環境の差異が、子どもの読書活動に影響を与えることへの言及を狙った。現在家庭環境と子どもの読書活動との関連などについて考究中であるが、それと共に読書媒体の^{メディア}広がりについて考察している。

従前の読書調査では、読書媒体は紙であることが前

提とされてきた。この傾向は大筋では変わっていない。しかしSNSの普及、また急速な社会のAI化の潮流を眺むと、紙媒体に依存した読書が依然として主流という知見 (findings) は、全体傾向としては概ね正しいとはいえ、子どもたちの読書行動の詳細な流行を、はたして把捉しきれているのか? という、一抹の疑問も残る。

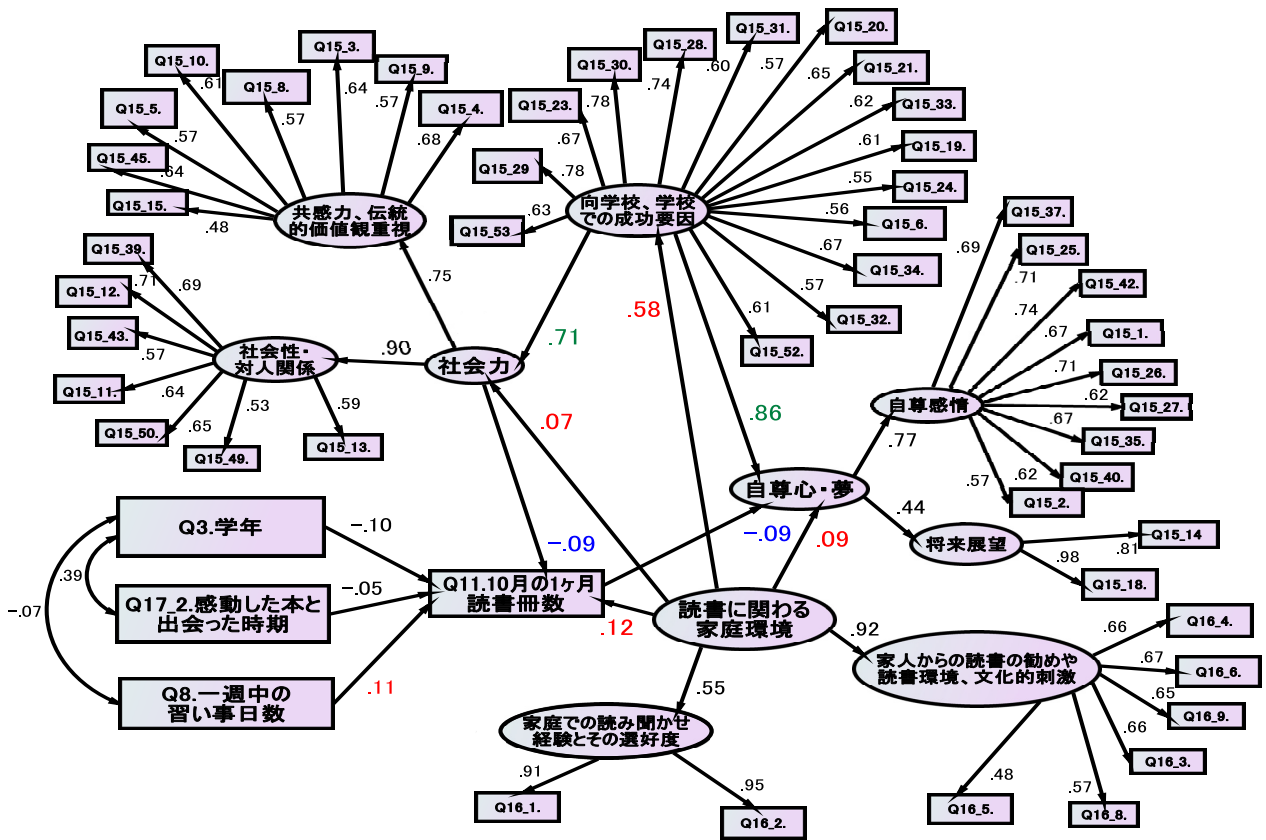
そこで本稿では、データ類を再分析して分かってきた、子どもたちの読書活動の多様化に着目する。具体的には、調査データを活用し、i 読書媒体の^{メディア}広がりを捉えることを狙う。このことは、デジタル・ネイティブの時代が到来する、将来の子どもの読書行動の多様化を予見することに裨益する findings を提供しうものとなろう。

さらに、ii 家庭の文化環境が子どもの読書活動にどの程度影響・関連しているかについても、可能な範囲で言及してみたい。読書量は経済資本や文化資本といった親族から受け継ぐSESと無関係とは言えないと考えられているが、実態はどうなっているのか。採取されたデータから考えてみたい。

2. 先行研究の検討

SLA・毎日新聞による「学校読書調査」の設計・分析に関わり出してから数年間で、他の研究プロジェクトにおいて子どもの読書を巡るビッグデータが採取され、その結果が報告書などに上梓され発表されてきた。その主なものとしては、NIYE (国立青少年教育研究機構: *National Institution For Youth Education*) 編 (2013) や浜銀総合研究所 編³ (2017) がある。前者

* 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)



Q15Q16の因子構造と、Q11読書冊数との関連
 モデル番号1 CMIN=21113.609 df=1311 p=.000 GFI=.766
 GFI=.777 AGFI=.757 RMSEA=.066

図1 「読書活動」に関する実態調査」SEMによる暫定最終model ※図1中のパスや共分散は全て有意 ※誤差変数(e), 攪乱変数(d)は、省略

はTVなどのメディアで紹介され、高校生までの子ども時代に読書や体験活動の経験が豊富だと、成人してからの意識・能力⁴が高くなること、データからのfindingsによって示された。また後者については、子どもの読書活動の実態(2章)、学校での体制・取組や家庭環境との関連(3章)、子どもの読書活動の影響(4章、文献調査による)、意識・行動等との関連性(5章)など、詳細且つ多岐にわたるfindingsが、報告書中に示されている。

また筆者も直近の成果として、自ら採取の「読書活動」実態調査dataから、^{インセンティブ}「意欲」と読書量の関係(研究関心1)、「紙媒体以外からも活字に触れる、デジタル・ネイティブ世代の子ども読書現実への接近」(研究関心2)、そして「家庭環境が読書に及ぼす影響」(研究関心3)の3点に関して、学会報告(腰越, 2016)などを通して発表してきた。

これらの先行研究からは、細かくは数多くのfindingsが得られてはいる。筆者の学会報告でのfindingsを例示するならば、構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling, SEM)を用いて、読書冊数と他の問との関係を図示し、そこに上記の3つの研究関心を絡めて議論していった。上に示す図1が、

2016年度段階の学会報告(腰越 *ibid.*)での暫定最終モデル⁵である。ここから導かれた論点を簡略に説明すると、次の3点に纏めることができる。

1. 高次因子分析を適用して得られた「読書に関わる家庭環境」と命名した構成概念たる潜在因子から伸びる4つのパスに注目すると、図1に示される通りであり、係数の高い順に「向学校、学校での成功要因」因子へのパス(係数値0.58)、Q11読書冊数へのパス(係数値0.12)、「自尊心・夢」因子へのパス(係数値0.09)、「社会力」因子へのパス(係数値0.07)の4つが該当する。これらは家庭の文化環境が、学校での成功、読書量、自尊心、好感度(likable)に結びつく社会力に、プラスの影響を及ぼすことを示唆する。

2. 「向学校、学校での成功要因」因子から、「自尊心・夢」因子と「社会力」因子に、それぞれ係数値0.86、0.71のパスが伸びていることが注目される。巷では価値観の多様化が謳われる現代ではあるが、この調査データからは、学校での成功が、今どきの中高生の自尊心や夢、好感度(likable)に結びつく社会力などへ、依然として強い影響力を及ぼしているように読み取れる。要するに、学校で上手くやれている生徒は、そこそこ生きやすいが、そうでない生徒には

夢も持てず自信も抱けない、モノトーンな「終わりなき日常」が連綿と続いているのだ、と。

3. 「子どもの頃の読書活動は、豊かな人生への第一歩！」(NIYE編, 2013) などと謳われたNIYEによる言説を裏打ちするfindingsは、本調査データからは確認できない。パスでいえば、「社会力」因子から「読書冊数」へと向かうマイナス係数値(-0.09), 「読書冊数」から「自尊心・夢」因子へと向かうマイナス係数値(-0.09)などが該当する。特に後者のパスからは、本を読んでいるからといって自尊感情や夢を持てるわけではないことが分かる。それよりも生徒の自尊心や夢には、学校での成功がなんといっても効いている(係数値0.86), と読み取れる。

これらのfindings自体、興味深いものであると思料されるが、GFI=.777, AGFI=.757, RMSEA=.066といった適合度指標値が基準を十分に満たしておらず、またモデル構築までのプロセスを学会報告では説明したものの、SEM図の煩瑣さやパスの方向などについて、十分な理解を得られていない。

そこで今回は、基本に立ち返り、先のi 読書媒体の広がり捉えること、ii SESが子どもの読書活動にどの程度影響・関連しているか、についてデータを再分析してみることにした。

3. データ概要と分析方法

本稿で主に用いるデータとしては、自ら採取の「読書活動」実態調査dataに加え、今回特に分析の許諾⁶を得たNIYE調査dataも採り上げる。理由は、前者は既にある程度分析を手がけており、データの特性やサンプリングの際に生じた限界が分かっているからである。対して後者は、筆者自身が分析を手がけたことがないことや、幅広くしかも大量にサンプリングがなされたビッグ・データであることが挙げられる。そして何よりも両者の分析で類似の方向性を持つ結果が見いだせれば、そのfindingsは、サンプル・セレクション・バイアスを超えた、より一般化できるもの、という。それが故に、二つの調査dataを採り上げることにした。

3. 1 「読書活動」実態調査dataの概要

*名称: 「読書活動」に関する実態調査

*目的: 1. 意欲(インセンティブ)と読書量の関係を知ること。/ 2. 紙媒体以外からも活字に触れる、デジタル・ネイティブ世代の子どもの読書現実に迫ること。/ 3. 家庭環境が読書に及ぼす影響につい

て知見を得ること。

*調査内容: フェイス・シート部分(Q1~Q10), 読書冊数(Q11), 情報収集媒体(Q12Q13), 各種媒体利用時間(Q14), 意欲を含む自身についての事柄(Q15の53項目), 家庭での経験(Q16の10項目), 感動した書物(Q17)。

*調査対象: 中学生(1~3年生)3,083名, 高校生(1~3年生)2,401名。

*調査方法: Web調査と郵送質問紙調査を併用。

*調査時期: 2015年11月~12月。

3. 2 NIYE調査dataの概要

*名称: 「子どもの読書活動と人材育成に関する調査」の<中学生用>と<高校生用>

*目的: 子ども(特に中高校生)の読書活動の実態や現在の意識・能力を把握し、子どもの読書活動の推進に資する資料を収集することを目的とした。

*調査内容: (1) 子どもの頃の各年齢期における読書活動: 昔話や読み聞かせなどの経験(Q3), 読書のジャンル, 選書方法や読み方(Q4)など/ (2) 子どもの頃の各年齢期における体験活動: 自然体験, 動植物とのかかわり, 友だちとの遊び, 地域活動, 家族行事(Q5)/ (3) 現在の読書活動: 読書好き, 読書冊数, 読書時間数, 忘れられない本(Q2)など/ (4) 現在の意識・能力: 自尊感情, 共生感, 意欲・関心, 規範意識, 人間関係能力, 職業意識, 文化的作法・教養, 将来展望, 自己啓発, 市民性, 充実感(Q8)など/ (5) その他: 学校での読書指導(Q6), 得意な教科(Q7), 兄弟(Q9), 部活動, 塾(Q11)など

*調査対象: 高等学校2年生・中学校2年生。内訳は、高等学校2年生300校中278校回収(回収率92.6%)10,234人, 中学校2年生360校中338校回収(回収率93.8%)10,965人⁷。

*調査方法: 学校を通じた郵送法による質問紙調査

*調査期間: 平成24年3月

3. 3 分析方法

前述した本稿の目的に照準し、二つの調査データの該当部分を分析し、結果を紹介していく。まず目的i「読書媒体の広がり捉えること」について。「読書活動」実態調査では、10月1ヶ月の読書冊数を尋ねた問(Q11)に対して、その内訳を尋ねた問(Q12)があるので、この部分の集計結果を見直す。またNIYE調査では、調査時期1ヶ月間に読んだ本の読書媒体を尋ねた問い(Q2.2.3)が該当するので、この部分のクロス集計などをみる。

続いて目的 ii 「SESが子どもの読書活動にどの程度影響・関連しているかを調べること」についてだが、NIYE調査には直接に関連する質問項目がない。そこでここでは、筆者採取の「読書活動」実態調査 data の該当部分を分析していくこととする。

4. 分析結果

4. 1 素集計からのデータ特性～NIYE調査data～

SLA・毎日新聞による「学校読書調査」では一定期間の間に全く本を読まない「不読」の児童・生徒が問題とされ、専ら議論の俎上に載せられていたが、NIYE調査データでは下記のような実態となっている(図2)。

不読率は、中学生よりも高校生、女子よりも男子の方が、より高率であり、この傾向自体は「学校読書調査」と変わらない。しかし、高校生では男女の有意差が消えている。また全体の不読者においても、0.1%水準有意とはいえ、男子で2,972人(29.5%)、女子で2,620人(25.7%)となっており、男女の隔たりが小さくなっている。これらの比率を、SLA・毎日新聞による「学校読書調査」の不読率⁸と比較すると、明らかに低率となっている。これらの理由として考えられるのは、一つには受験のプレッシャーがかかる特殊な

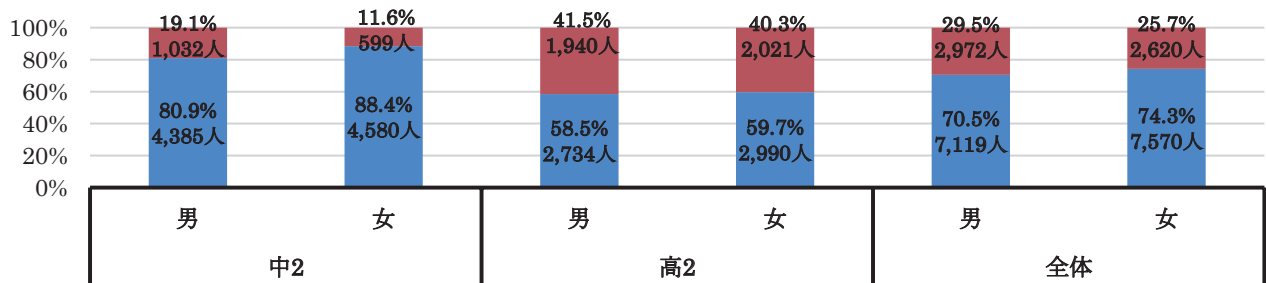
学年である中3や高3を、最初から外してサンプリングを行っており、相対的に時間の余裕のある中高生学年を調査対象にしたことが大きいと思料される。この限りにおいて、NIYE調査は、データ採取にある程度成功しているといっていよう。

4. 2 読書媒体の広がりに関して

4. 2. 1 NIYE調査より

NIYE調査では、「(Q2.2.3) 次のようなツールを使った読書を1日あたりにどれくらいしますか」という間で、一日あたりの読書媒体利用時間を、書籍、PC、携帯電話・スマホ・タブレットという媒体別に3群に分けて尋ねている。これを校種別(表1)と男女別(表2)という属性別の変数でクロスにかけ、媒体ごとに表示させてみた結果が以下となる。2つの表で留意されたいのは、媒体別・属性(学年と男女)別に、読書時間の構成比(行%)を示したもので、各セルの比率は、(当然のことながら)全体%を意味するものではない、ということである。

さらに、表1と表2の各表の赤斜体文字についても説明しておく。これらは、クロス集計の際に、調整済み(標準化)残差⁹を求めたところ、絶対値が1.96以上となったセルであり、5%水準以上で有意であることを意味する。例えば、表1中の「書籍」の部分でい



■ 問2.2. この1ヶ月の読書 読んだ

■ 問2.2. この1ヶ月の読書 読まなかった

中2: $\chi^2(1, N = 10,596) = 113.907 \quad p < .001$ 高2: $\chi^2(1, N = 9,685) = 1.381 \quad n.s.$ 全体: $\chi^2(1, N = 20,281) = 35.522 \quad p < .001$

図2 この1ヶ月間(2012年2月)の読書

表1 学校種 × [問2.2.3-1.] 読書mediaごとの読書時間

		0分	0～15分 未満	15～30分 未満	30分～1時間 未満	1～2時間	2～3時間 未満	3時間以上	合計 (観測度数)
書籍	中2	7.3%	22.0%	28.7%	22.4%	10.8%	4.1%	4.7%	8,967人 (100%)
	高2	13.9%	25.2%	23.0%	19.2%	10.9%	4.0%	3.8%	5,868人 (100%)
PC	中2	67.7%	6.4%	6.2%	7.8%	6.1%	2.5%	3.3%	7,602人 (100%)
	高2	75.2%	5.7%	4.8%	5.9%	4.2%	1.4%	2.7%	4,915人 (100%)
携帯, スマホ, タブレット	中2	69.9%	7.0%	6.0%	5.8%	4.3%	2.3%	4.7%	7,587人 (100%)
	高2	51.0%	9.2%	9.2%	11.1%	7.8%	4.3%	7.6%	5,187人 (100%)

書籍: $\chi^2(6, N = 14,835) = 237.789 \quad p < .001$ PC: $\chi^2(6, N = 12,517) = 91.447 \quad p < .001$

携帯, スマホ, タブレット: $\chi^2(6, N = 12,774) = 493.593 \quad p < .001$

表2 性別 × [問2_2_3-1.] 読書mediaごとの読書時間

		0分	0～15分未満	15～30分未満	30分～1時間未満	1～2時間	2～3時間未満	3時間以上	合計 (観測度数)
書籍	男	11.0%	23.7%	25.9%	20.8%	10.1%	3.9%	4.6%	7,231人(100%)
	女	8.7%	22.9%	27.0%	21.4%	11.6%	4.2%	4.1%	7,562人(100%)
PC	男	72.5%	6.3%	5.0%	6.2%	4.9%	1.8%	3.3%	6,040人(100%)
	女	68.9%	6.0%	6.2%	7.8%	5.8%	2.4%	2.9%	6,437人(100%)
携帯, スマホ, タブレット	男	69.4%	7.9%	6.3%	6.1%	3.9%	2.2%	4.3%	6,086人(100%)
	女	55.7%	7.8%	8.3%	9.6%	7.4%	4.0%	7.3%	6,648人(100%)

書籍: $\chi^2(6, N = 14,793) = 35.280 \quad p < .001$ PC: $\chi^2(6, N = 9,685) = 37.413 \quad p < .001$

携帯, スマホ, タブレット: $\chi^2(6, N = 12,734) = 313.190 \quad p < .001$

えば、「0分」では高2が中2よりも有意に比率が高く、逆に中2は有意に比率が低いことを意味する。つまり不読傾向は、中2よりは高2に顕現していることが確認できる。

ここまでの説明を踏まえ、まず表1から見てみると、書籍媒体での読書の優勢は認められるものの、PCや携帯、スマホ、タブレットでの読書時間も一定程度の比率が認められる。より詳細に言うと、PCの方では、高2より中2の方が、PC利用読書時間が長い傾向が掴める。また、携帯やスマホ、タブレットなどによる読書時間は、その逆となっており、中2より高2の方が全般に利用時間が長いことが分かる。他の調査結果などからも知られるとおり、携帯電話所持率は中学生より高校生の方が大である。したがって、表1のこの部分の結果は妥当とも考えられよう。

続いて男女別でみた表2である。表1と同様、書籍での読書数の優勢はあるものの、PC媒体でも携帯、スマホ、タブレット端末でも一定の読書利用が認められる。特に、PCや携帯、スマホ、タブレットの部分の女子のセルに、調整済み(標準化)残差が有意を示

す赤斜体文字が多く見られるが、これは男子よりも女子の方がこうした媒体の利用率が有意に高い傾向を示していると考えられる。

さらに表1と表2では、各媒体利用時間0分、即ちその媒体を利用して読書しないという不読の選択肢も集計のセルに含まれている。そこで、これらを敢えて外して図示してみたものが、図3と図4¹⁰である。

これら図3と図4からは、一時間以上の読書をする層、即ち相対的多読層において、PCや携帯、スマホ、タブレットの使用が認められることが確認できる。つまり多読層においては、紙媒体の書籍に留まらない、デジタル機器を用いた読書活動がなされ始めており、こうした活動の浸透が確認されうるということである。全体をみれば、紙媒体でのアクセスの度数(人数)が多いことは否定しない。しかし、沢山本を読む生徒になればなるほど、様々な機器を利用して活字に触れている事実も確認できうるのである。

4. 2. 2 「読書活動」実態調査より

筆者が採取した「読書活動」実態調査dataからも、

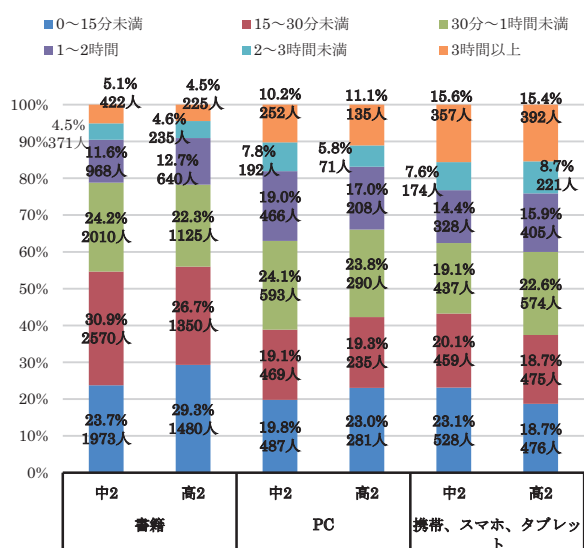


図3 学年 × (Q2_2_3.) 媒体ごとの読書時間

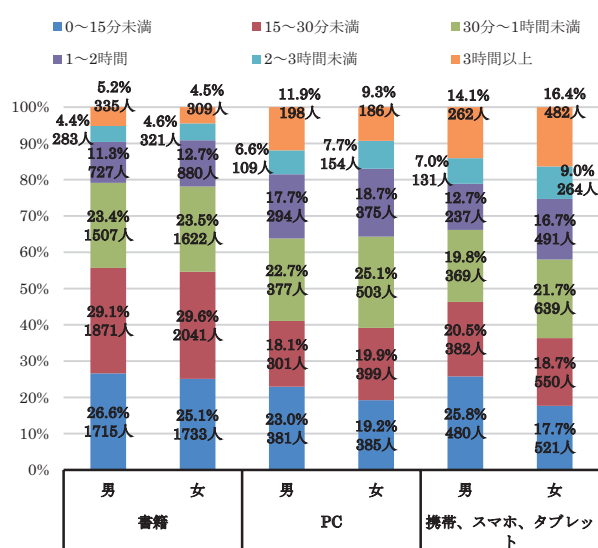


図4 性別 × (Q2_2_3.) 媒体ごとの読書時間

再分析を実行したところ、読書活動の広がりを指摘しうる。というのは、当該調査 data の全サンプル数は 5,484 名 (中 3,083, 高 2,401) だが、10 月一ヶ月の読書冊数 (Q11) に対して、その読書の媒体を尋ねた Q12¹¹ に注目すると、Q12 の回答中、Q11 で 0 冊回答の 1,471 名は非該当、Q11 で無回答の 481 名は不明と同定できる。したがってこれら 1,952 件を Q12 の各項目の回答から除き、データを修正後に再分析を実行すると、以下の結果を得る (表 3)。

表3 10月1ヶ月の読書 (Q11) に用いた媒体

Q12.1 ~ 6 読書 media	選択率 (%)	data 数 (有効)
1. 紙 (冊子)	93.4	3535
2. 携帯電話	17.0	3303
3. PC やタブレット	7.3	3280
4. 電子書籍リーダー	1.7	3278
5. 何れでもない	1.6	3271
6. その他	0.8	3269

表 3 を見る限り、2015 年 10 月の 1 ヶ月間に 1 冊以上本を読んだ回答者 (Q11) の読書媒体は、紙 (冊子) が 9 割超ではあるが、他方では携帯で 17%、PC で 7.3% の読書が認められることが分かる。さらに読書冊数 (Q11) は、全回答者の 87.4% が 5 冊以内になっているので、5 冊までの回答者と読書媒体選択の間 (Q12) との間で多重回答クロス分析を試みた。すると、1 冊グループは専ら紙冊子にアクセスの読書であるが、2 冊以上グループになると、読書媒体としての携帯電話の選択率が 10% 超となり、5 冊グループでは携帯でも 20.9% が読書をしていることが分かってくるのである (表 4)。

表4 10月1ヶ月の読書冊数 [1~5冊まで群] (Q11) × 読書媒体 (Q12.1~6) [多重回答]

	1冊	2冊	3冊	4冊	5冊
1. 紙 (冊子)	92.7%	94.3%	95.5%	96.5%	95.3%
2. 携帯電話	6.4%	13.5%	17.3%	20.7%	20.9%
3. PC やタブレット	1.4%	4.5%	7.6%	6.1%	9.1%
4. 電子書籍リーダー	0.4%	0.9%	2.1%	0.5%	3.1%
5. 何れでもない	2.3%	0.7%	1.2%	0.5%	1.6%
6. その他	0.3%	0.8%	0.8%	0.0%	0.8%

つまり表 4 から明らかなように、相対的多読群では紙のみではない読書媒体の広がりが、或いは紙冊子だけの読書活動とは異なる読書活動の多様化の動き

が、おぼろに確認できると言えよう。

以上、NIYE 調査 (4.2.1) と「読書活動」実態調査 (4.2.2) の何れからも読書媒体の広がりが確認された。そうだとすると、従前の分析ではこの広がりを見逃していた¹² 嫌いがある。したがってここでは、寧ろ読書媒体の広がりを強調し、その把握の重要性を指摘しておきたい。

4.3 SES と子どもの読書活動との関連

NIYE 調査では、階層差、即ち親の社会経済的地位 (Socio-economic Status, SES) を直接問うた質問項目¹³ はない。したがって親の SES と子どもの読書活動の関連をみるのは難しいので、「読書活動」実態調査 data から、SES に関連すると思われる質問項目を採り上げ、子どもの読書活動の関連について接近する。採り上げるのは、「読書活動」実態調査 data の Q16 の 10 項目であり、家庭での経験を 6 択¹⁴ で尋ねている。内容は以下の通りである。

Q16. お家での経験についてお尋ねします。次のようなことがどの程度あてはまるか、一つを選んで下さい。1. 小学校入学前、家の人に本を読んでもらうのが好きだった / 2. 小学校入学前、家の人に本をよく読んでもらった / 3. 最近家の人が読書しているのを見かける / 4. 最近家の人に読書を勧められる / 5. 家には、本 (マンガや雑誌を除く) がたくさんある / 6. 家の人に、博物館や美術館へ連れて行ってもらう / 7. 家の人とテレビのワイドショーやバラエティ番組を見る / 8. 家の人とニュースや新聞記事について話す / 9. 家の人から外国や外国の文化について教えてもらう / 10. 家の人との相談で、ネットゲームやスマホの時間は制限されている /

この Q16 の 10 項目と読書冊数のクロス集計を考えるが、「読書活動」実態調査 data (5,484 名分) の場合、Q11 の 10 月 1 ヶ月の読書冊数は、1 冊も読まなかった不読者は 1,471 名で、以下読破数 1 冊の者 1,039 名、2 冊 896 名、3 冊 517 名、4 冊 200 名、5 冊 254 名 で、全体の約 8 割 (79.8%, 4,377 名) を占めるにいたる。したがって 5 冊までの読者 4,377 名分と Q16 の 10 項目でクロス集計を考えた。

クロス集計の結果、Q16_7 のみ非有意であったものの、その他の組み合わせは全て 0.1% 水準有意となった。以下、特徴的な 3 つの組み合わせを紹介する。

まず表 5 で読書冊数 (Q11) と家の蔵書 (Q16_5) の関係を示してみた。家の蔵書は、SES のうち経済資本や客体化された文化資本などの代替指標とみなすこともできよう。そう考えた時、「1. 全く当てはまらない」カテゴリーでは不読者 (0 冊) 群で圧倒的に多く

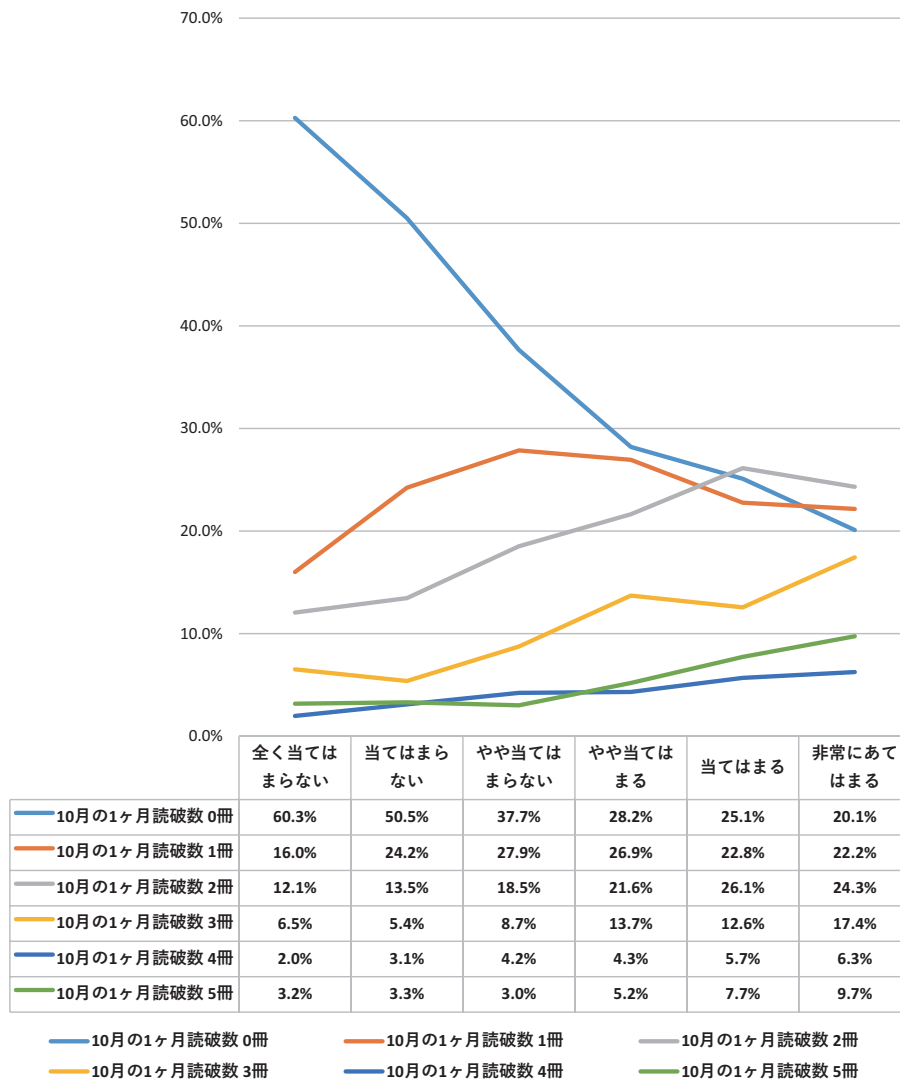
(60.3%), 「6. 非常に当てはまる」カテゴリーでは多読者群で増加傾向にあること(3冊で17.4%, 4冊で6.3%, 5冊で9.7%)は、経済資本・文化資本が一定程度子どもの読書環境を保障する土台になっていると考えられるのではないかと、右肩下がりの不読者群の折れ線(淡い青)と、緩やかな右肩上がりの5冊群のそれ(黄緑)とが、好対照をなしていることに注目したい。つまり data から、豊富な蔵書は読書好きの子どもが育つ培養基ともなりうることを示されており、その背後には経済資本・文化資本量が存在しうることが推察されるわけである。

続いては、読書冊数(Q11)と博物館・美術館に行った経験(Q16_6)との関連である。博物館・美術館に行くという慣習行動は、ブルデュー(Bourdieu, Pierre)のいう文化資本の中のハビトゥス(habitus)の概念に親近的である。日本人にとって博物館・美術館に通うことは、そうした行為が比較的一般化していると思われる欧米人以上に、非日常的な行為ではない

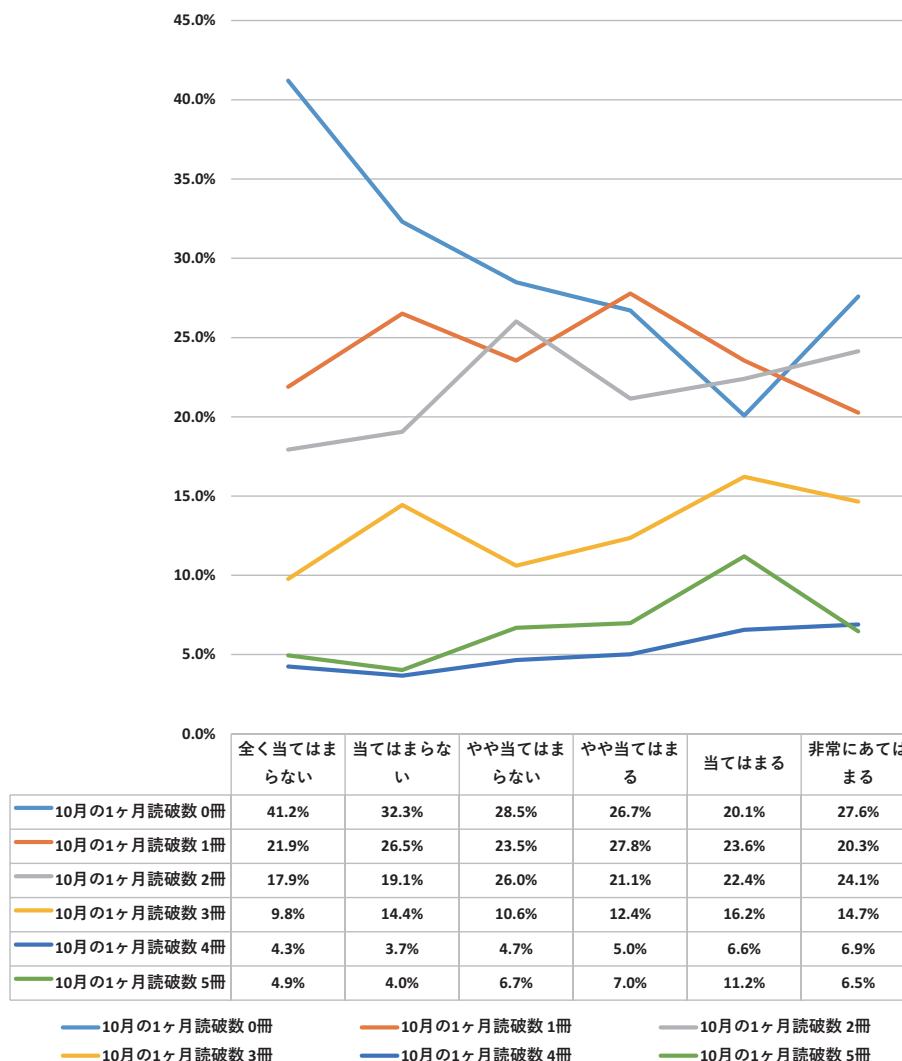
かと思料される。というのは、表6中においても、特に不読者群では、「全く当てはまらない」・「当てはまらない」カテゴリーの比率が突出して高いことが看取されるからである。また、3冊以上の多読者群においては、緩やかな右肩上がりを示すが、高比率とはいえない。

とはいえ、博物館・美術館に行くという行為を経験してきた中高生には、親のSESの高い家庭の子弟が多く含まれる傾向が認められると考えられるのではないかと。そう考える根拠は、表6でいえば「全く当てはまらない」カテゴリーにおける不読者比率の高さと、4~5冊読者比率の低さということになる。表5の結果とも相俟って、博物館・美術館に行った経験をもつ→家庭の経済資本・文化資本が潤沢→親のSESが高い→蔵書が多い→子どもは自ずと多読傾向になる、という類推が成立する。つまり、SESの高さが文化的慣習行動をうみ、そうした文化資本量が読書活動を促進しうると考えることは可能であろう。

図表5 10月1ヶ月間読書冊数(Q11) × 家に本(漫画や雑誌を除く)が沢山ある(Q16_5.)



図表6 10月1ヶ月間読書冊数 (Q11) ×博物館や美術館へ連れて行ってもらう (Q16_6)



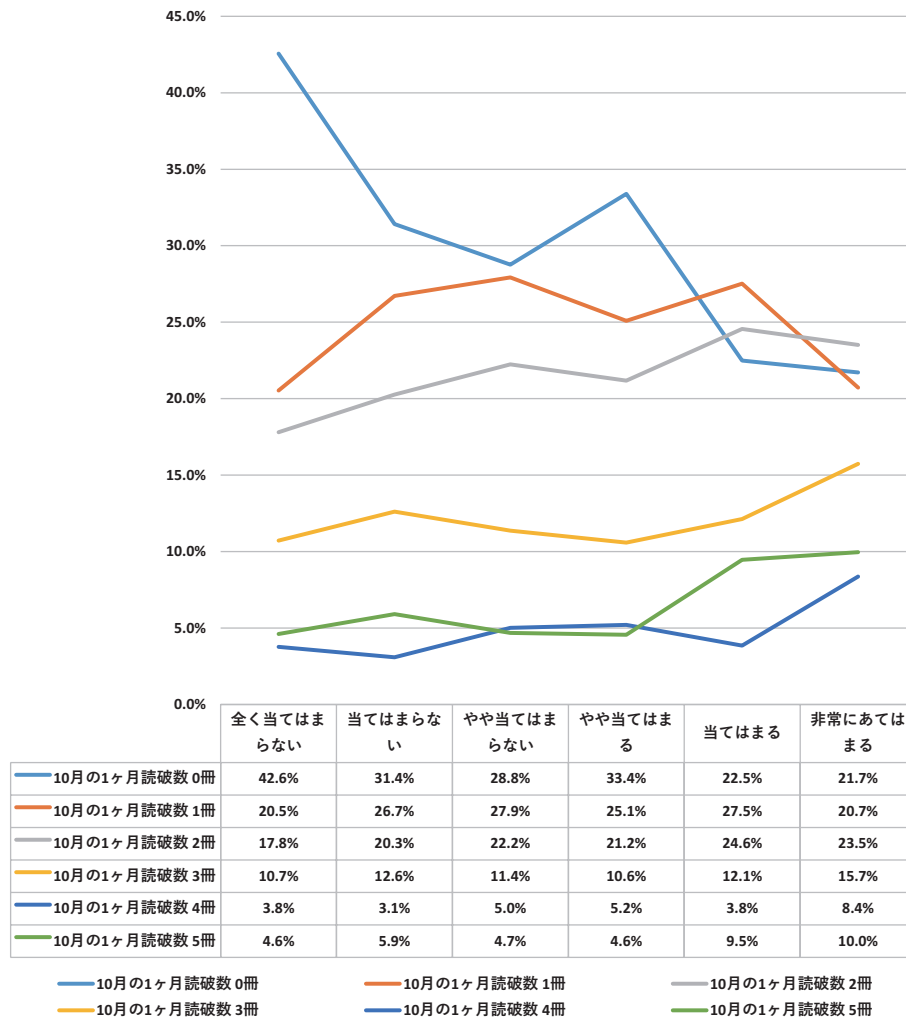
第三に、読書冊数 (Q11) と、家でのネットゲームやスマホの時間制限 (Q16_10) との関連についてである。SNSなどの機器へのアクセスに制限をかけることは、階層差の問題もさることながら、寧ろ各家庭の子どもに対する躰がどれほどしっかりしているかを示唆するものであるとも解せられる。そのように考えて表7をみると、「全く当てはまらない」カテゴリーでは、不読者の比率が傑出して高いことが分かる。ゲームやスマホに親が制限をかけない、いわばレッセ・フェール (自由放任主義) の躰の家庭にあつては、読書活動を慣習行動とすることは、なかなか困難であろうことが推察される。対して「非常に当てはまる」カテゴリーでは、右肩上がりの多読層 (黄緑、青、黄色) の優位状況が認められる。このことは読書媒体 (メディア) の広がりとは矛盾するようであるが、多読層はSNS環境下でのデジタル機器を、ゲームやネットサーフィンやライン等ばかりではなく、読書にも賢く利用していると解釈すれば、了解できるだろう。

さらに表7から派生して、もう一点指摘しうることには、貧困などの「格差」は、多くは教育の格差から生まれるため、教育格差を縮小すべく、貧富の差に関わりなく全ての子どもに対して乳幼児期に非認知能力を育成する働きかけを重視すべきだと主張するヘックマン (Heckman, J. Joseph) の議論の重要性である。

ヘックマンが重視した非認知能力は、精神的健康、根気強さ、意欲などを指すとされるが (Heckman 訳書, 2015), こうした学力以前に身につけるべき能力は、一見自由放任主義から生まれるかにみえて、文字通りのほったらかしの意味合いでは決してなからう。そうではなく、親が物事の是々非々を、子どもが就学前の段階に教え諭しながらその成長を見守る環境があつた上での「自由放任主義」なのであつて、表7でいえば、ネットゲームやスマホの時間が無制限、という状態を意味するものでは決してないはずである。

筆者が思料するに、就学前の非認知能力がしっかりと涵養されるように育つた子どもこそ、中学生になつ

図表7 10月1ヶ月間の読書冊数(Q11) × ゲームやスマホの時間に制限あり(Q16_10)



てから家人と相談しながらSNSとの接触時間をコントロールできる生徒に成長できるわけであり、結果必然的に多読傾向に導かれるのではないだろうか。文字通りのほったらかしは、非認知能力の伸長はもとより読書習慣にはなかなか結びつきにくいということを、表7は、メタ的に我々に教えてくれているとは考えられないだろうか。

5. まとめ～課題と展望を含めて～

本稿では、NIYE調査と「読書活動」実態調査という2つのデータから、i 読書媒体の広がりを捉えること、ii 家庭の文化環境が子どもの読書活動にどの程度影響・関連しているか、をみることを試みた。iについては、相対的多読層において読書媒体の拡大傾向が確認できたように思料する(表1～表4)。またiiについては、親のSESを支える経済資本や文化資本が中高生の読書活動に無関係とは言えないことを傍証した(表5～表6)。さらに多読層は、デジタル機器やSNS

の娯楽使用を、親との相談でコントロールしている傾向にあることが窺われることから(表7)、非認知能力を親や周囲の環境などから涵養されることが、子どもには大切なのではないかと推論した。

今後の課題は、読書媒体の広がりによって親のSESが潤沢な子どもが益々有利になり、デジタル機器などを容易に持てる子どもとそうでない子どもとの格差が拡大しない方略を考えることである。また本稿でも触れた非認知能力を、全ての子どもに就学前教育の段階で涵養するように働きかけることも大切だろう。このことは容易ならざることではあるが、ほったらかしやニグレクトの状態に子どもを放置するのではなく、親や周囲の見守りが必須の必要条件となろう。というのは、そのことがSNSが普及発展する今後の世界で、ゲームや娯楽だけにしかデジタル媒体を利用しようとする子どもの増加に、一定の歯止めをかけることに繋がると思料されるからである。

最後にこれからの展望としては、図1で紹介したSEMによるモデルを、例えばNIYE調査dataにも実行

し、「読書活動」実態調査のモデル(図1)との異同を確認した上で、特に共通部分から子どもの読書活動を促進する条件を、より深く探っていきたい。というのは、良書を読破することは、優れた先人と出会い、対話できるようなものであるが、それは子どもの社会化にも裨益するに違いないと考えるからである。

キーワード

読書調査, 読書^{メディア}媒体, SES; Socio-economic Status, 文化資本, 非認知能力

謝辞

NIYE調査dataに関しては、注6でも言及したとおり、独立行政法人国立青少年教育振興機構に特別に個票データの再利用を許諾いただき、データを分析させて頂いた。記して謝意を表したい。

「読書活動」実態調査は、JSPS科研費 基盤研究C(課題番号15K04349)[平成27~29年度「『不読』は本当か?—デジタルネイティブ世代の読書に関する実証研究—」(研究代表・腰越 滋)]の成果である。こちらにも感謝申し上げる。

引用・参考文献

- Heckman, J. Joseph (著), 古草 秀子 訳, 2015『幼児教育の経済学』, 東洋経済新報社。
- (株) 浜銀総合研究所 編 2017, 『子供の読書活動の推進等に関する調査研究 報告書』, 平成28年度文部科学省委託調査。
- 腰越 滋 2013, 「子どもの不読傾向に関する一考察—「第57回学校読書調査」の分析結果を手がかりとして—」, 『東京学芸大学紀要・総合教育科学系 I』, 第64集, 55-67頁。
- 腰越 滋 2014, 「読書を支える活動や行動とは何か?:『第58回学校読書調査』分析dataの構造方程式モデリング」, 『東京学芸大学紀要・総合教育科学系 I』, 第65集, 19-34頁。
- 腰越 滋 2016a, 「子どもの『不読』現象の背景要因は何か?『第57回学校読書調査』の分析結果に基づく再考察」, 『東京学芸大学紀要・総合教育科学系 I』, 第67集, 31-41頁。
- 腰越 滋 2016b, 「デジタル・ネイティブ世代の子どもの読書—『読書活動』に関する実態調査より—」, 『日本教育社会学会 第68回大会 発表要旨集録』, 名古屋大学, pp.52-53。
- NIYE 編 2013, 『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書[概要]—子どもの頃の読書活

動は、豊かな人生への第一歩—」, 独立行政法人国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター/総務企画部調査・広報課。(http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/: last access : 2017.09.15)

注

- 1 「学校読書調査」の場合、定型のフォーマットがあり、これを大きく変えることは出来ない事情があることを調査のコンサルティングを務めるプロセスで理解した。また、昨今喧伝される「格差」問題は、ジャーナリズムで煽られ、学会でも関心事ではあるが、子ども自身の問題を越えた家庭の情報までもが含まれるせいか、学校現場ではこれに関連する問いをダイレクトに質問項目に含めると、調査自体の協力を拒否されるリスクが高まるといった事情もあったと考えられる。
- 2 JSPS 科研費 基盤研究C(課題番号15K04349)[平成27~29年度「『不読』は本当か?—デジタルネイティブ世代の読書に関する実証研究—」(研究代表・腰越 滋)]の助成を指す。
- 3 2016年実施の浜銀研究所調査では、7名の有識者による調査検討委員会(座長・秋田 喜代美 東大大学院教授)が編成されたが、筆者もこれに加えて頂いた。なおNIYE調査報告書においても、研究会座長は秋田 喜代美教授が務められている。
- 4 成人してから(現在)の意識・能力は、「未来志向」, 「社会性」, 「自己肯定」(以上3者は合成尺度), 「意欲・関心」, 「文化的作法・教養」, 「市民性」から成り、質問項目を得点化して作成されている。得点化方法の詳細はNIYE 編(2013, 7頁), あるいは報告書本編「第3章 成人調査集計結果」の「4.子どもの頃の読書活動と現在の意識・能力の関係」の74頁を参照されたい。該当URLは次の通り。
http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/72/File/3syou.pdf ; last access : 2017.09.15
- 5 図1.中に含まれる各潜在変数を構成する質問項目の内容は以下の通り。SEMへの導き方については、学会報告(腰越 2016b)では説明したが、紙幅の都合上、本稿では割愛した。まず、Q15の53項目に探索的因子分析(EFA)を繰り返し実行し、以下の5因子を得た。
・「I. 向学校性, 学校での成功要因」(15項目) Q15_29 考えをまとめることが得意である / Q15_23 政治や社会的問題について自分の意見を持ち議論できる / Q15_30 物事を正確に考えることに自信がある / Q15_28 複雑な問題について順序立てて考えるのが得意である / Q15_31 勉強はクラスの中で出来る方だと思う / Q15_20 科学技術の発展に対応した技術を新たに修得したい / Q15_21 人生設計や

生き方に役立つ情報を、積極的に収集している／Q15_33 学校の授業は、よく理解できる／Q15_19 自分の能力を伸ばしたり発揮したりするために勉強や研究をしたい／Q15_24 新聞やテレビ、インターネットで政治に関する報道を進んで見る／Q15_6 分からないことはそのままにしないで調べる／Q15_34 授業中に自分の意見を、自信を持って発表できる／Q15_32 学校の宿題は、短い時間でやり終えることができる／Q15_52 嫌な出来事があったとき、その問題を解決するために情報を集める／Q15_53 他人の考え方を理解するのが比較的得意だ

・「Ⅱ. 共感力, 伝統的価値観重視」(8項目) Q15_4 友人が幸せな体験をしたと知ったら、自分まで嬉しくなる／Q15_9 交通規則など社会のルールは守るべきだと思う／Q15_3 悲しい体験をした人の話を聞くと辛くなる／Q15_8 叱るべきことをちゃんと叱れる親がいいと思う／Q15_10 電車やバスの乗車時、お年寄りや身体の不自由な人に席を譲ろうと思う／Q15_5 何でも最後までやり遂げたい／Q15_45 思いやりを持って人と接している／Q15_15 お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う

・「Ⅲ. 自尊感情」(9項目) Q15_37 今の自分に満足している／Q15_25 毎日の生活に満足している／Q15_42 自分に自信がある／Q15_1 自分のことが好きだ／Q15_26 自分の人生を主体的に送っている／Q15_27 自分の好きなことがやれていると思える／Q15_35 クラスの中で人気者だと思う／Q15_40 クラスの中で自分はいなくてはならない人だと思う／Q15_2 学校が好きだ

・「Ⅳ. 社会性, 対人関係」(7項目) Q15_39 新しい友人を作るのは簡単である／Q15_12 初めて会った人とでもすぐに話ができる／Q15_43 友人から、よく遊びに誘われる／Q15_11 ケンカをした友だちを仲直りさせることができる／Q15_50 人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする／Q15_49 人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ／Q15_13 近所の人に、あいさつができる

・「Ⅴ. 将来展望」(2項目) Q15_14 自分にはなりたいた職業ややってみよう仕事がある／Q15_18 私には将来の目標がある

次に同様の方法でQ16の10項目にEFAを繰り返し実行し、次の2因子を得た。

・「①. 家人からの読書の勧めや読書環境, 文化的刺激」(6項目) Q16_4 最近家の人に読書を勧められる／Q16_6 家の人に、博物館や美術館へ連れて行ってもらう／Q16_9 家の人から外国や外国の文化について教えてもらう／Q16_3 最近家の人を読書しているのを見かける／Q16_8 家の人とニュースや新聞記事について話す／Q16_5 家には、本(マンガや雑誌を除く)がたくさんある

・「②. 家庭での読み聞かせ経験とその選好度」(2項目) Q16_1 小学校入学前、家の人に本を読んでもらうのが好きだった／Q16_2 小学校入学前、家の人に本をよく読んでもらった

6 謝辞でも申し述べたが、国立青少年教育研究機構(NIYE)より個票データの再分析を許諾いただき、エクセルのcsvファイル形式の中高生データ部分を再分析させていただいた。当初予定の期間では作業ができず、分析期間を延長させて頂くというご配慮を賜ったことに深謝したい。

7 NIYEの報告書には、高2が10,227人、中2が10,941人と出ているが、いただいた個票データを再集計したところ、本文の結果となった。

8 「学校読書調査」の中での不読率は、最新(2016年)のもので高校生では、57.1%と高率になっている。詳細は以下に示す「全国SLA」サイトを参照のこと。(http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html; last access: 2017.09.15)

また筆者が採取の「読書活動」実態調査dataの方は、不読者は全体の約3割(29.3%)で、NIYE調査と同傾向であった。

9 標準化残差よりも検定力が高いとされる調整済み標準化残差を利用した。

10 表1と図3、表2と図4のパーセンタイルが一致しないのは、図3・図4では各媒体利用時間0分の不読群を欠損扱いして除いた上で、読書媒体ごとに校種別(図3)、性別(図4)のカテゴリ分布比を取り直したからである。つまり合計の観測度数が、表1・表2と図3・図4とは異なるわけである。

11 Q12は「Q11で読んだ本は、どんな媒体(メディア)からの読書でしたか。あてはまるもの全てを選んで、数字を○で囲んで下さい」というもので、選択肢は次の6つ。

1. 紙(冊子)／2. 携帯電話(ガラケーやスマートフォン)／3. パソコンやタブレット端末／4. 電子書籍リーダー(電子書籍を読むために作られた機器)／5. どれからも読んでいない／6. その他(具体的に記入:)

12 2016年度の学会報告において(腰越 2016b)、筆者は紙媒体の読書が主流であり、デジタル機器の広がりを軽視していたという反省点があり、その点を「媒体はデジタルよりも紙」などと、教育新聞社に取材され、Webサイトに採り上げられもした。(https://www.kyobun.co.jp/news/20160920_04/; last access 2017.09.15)。今後は、「紙媒体での読書活動が主流」のみで済ませず、デジタル機器利用の読書活動の広がりを仔細に分析していく方向で考えたい。

13 NIYE調査項目のうち、Q11_2で一週間の通塾日数を問い、Q11_3で一週間の習い事日数を問うている。またQ3で、

(a) 就学前, (b) 小学1～3年, (c) 小学4～6年, (d) 中学の4区分で, 「本の読み聞かせ経験 (Q3.2) について尋ねている。強いていえば, これら3質問項目はSESに関連する項目とみなせよう。

14 6択の内訳は, 6. 非常に当てはまる, 5. 当てはまる,

4. やや当てはまる, 3. やや当てはまらない, 2. 当てはまらない, 1. 全く当てはまらない, である。これらの順序尺度をスケールとみなし, 分析を行った。なお本稿では, 因子分析や合成変数を用いていないので, Q16_7のような逆転項目化が必要な項目もそのまま利用した。

データからみた現代の子どもの読書傾向

—— 読書媒体^{メディア}の広がりに着目して ——

The Tendency of Reading of Students of the Present Day from Data Analysis:

Observing a Spread of Reading Media

腰 越 滋*

Shigeru KOSHIGOE

学校教育学分野

Abstract

This paper analyzes two survey data about reading. I aim at investigating the following two matters through analysis.

- i . Catch a spread of reading media.
- ii . Domestic cultural environment investigates the degree which influences a child's reading activities.

The result is as follows.

- ・ I have verified that students not only reading the books of a paper medium, but acquiring text with digital equipment, such as PC, a mobile phone, and a tablet. Especially the student that reads many books does not only reading by a paper medium but reading while using digital equipment, such as PC, a mobile phone, and a tablet.
- ・ Many books are in a house, and the student with experience of going to an art museum and museum influences the reading activities of future times.
- ・ Similarly, parents' socio-economic status is concerned with the amount of reading.
- ・ The student restricted to parents in the time using a game or a smart phone can be reading a book. From this, the student who reads many books has not only amusement but a possibility of using digital equipment for reading well.
- ・ Parents need to watch without leaving a child alone. Moreover, training of the capability not to recognize is important for reduction of an educational gap. If a student can learn the capability not to recognize, he (she) consults with parents and can restrict the play using digital equipment

Keywords: Reading investigation, Reading media, SES; Socio-economic Status, Cultural capital, Non-cognitive abilities

Department of School Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は、読書に関する2つの調査データを分析することを通して、次の二つの事柄を調べることを目的とした。

- i . 読書媒体（メディア）の広がりを捉えること
- ii . 家庭の文化環境が子どもの読書活動にどの程度影響・関連しているか

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

i. については、紙媒体の書籍による読書が主流とはいえ、PCや携帯電話やタブレットなどのデジタル機器による読書の広がりが確認でき、特に多読層においてその傾向が強まることが確認された。

ii. については、家の蔵書数や美術館・博物館に行った経験が、その後の読書活動の促進に影響をもたらすと思料された。この背景には家庭のSESが背後で効いており、これが読書の多寡にも関わっているであろうことが推測された。また家人にゲームやスマートフォン使用の時間を制限されている生徒ほど本を読めていることから、多読層では娯楽だけではない読書での上手なデジタル機器使用の可能性が示唆された。さらに、ほったらかしでない親の見守りがあった上で、非認知能力を育成していくことは教育格差の縮小には大切で、非認知能力を身につけた生徒になってこそ、親との相談でデジタル機器の娯楽使用に制限をかけて利用できるのだと、推論された。

今後の課題としては、読書のデジタル機器利用の広がりで、格差拡大の懸念が生ずる。したがって、それを防ぐための方略案出の必要性が主張された。さらに、就学前の非認知能力の育成は大切で、それが将来、娯楽にではなくデジタル機器を読書に利用できる生徒を増やすことに繋がると、推論された。

キーワード：読書調査、読書媒体^{メディア}、SES；Socio-economic Status、文化資本、非認知能力